

2016年熊本地震による 影響調査の結果(3年目調査を終えて)

くわみず病院
外来看護師長
高峰 明貴代

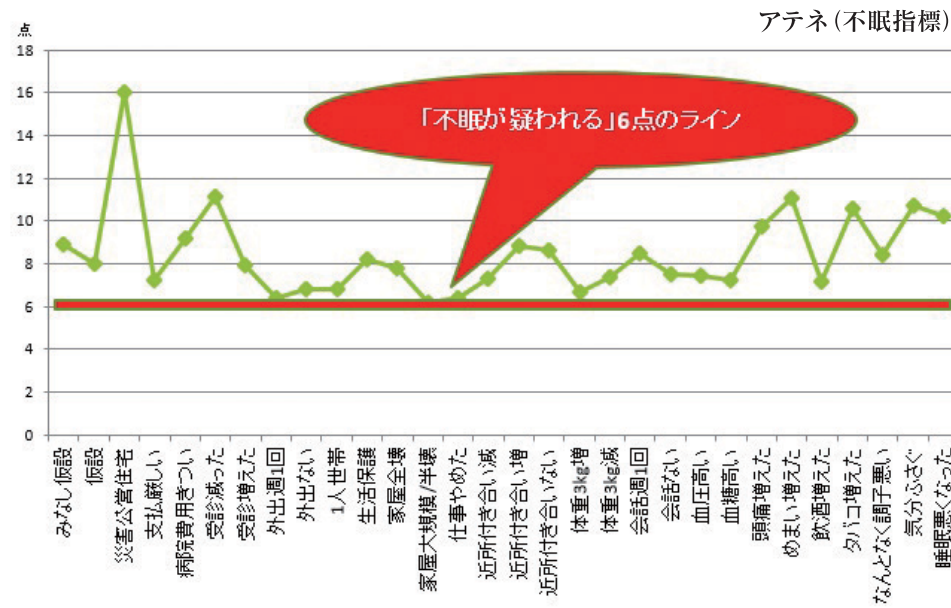
2016年熊本地震から4年が経ちました。くわみず病院では来院患者様に御協力を頂き、地震翌年から「熊本地震による影響調査」を行ってきました。

2017年度第1回調査では家屋被害の大きさや生活背景によって体調面に様々な不調をきたしている結果が出ました。2018年度第2回目調査では後期高齢者や生活保護受給者の方々の不眠やうつ病リスクが高く、生活再建支援が不十分であると考えました。今回2019年度3回目調査では不眠やうつ病リスクの割合は減ってきたものの全国平均より悪く、さらに身体面の不調を覚える人は変わらず数値が高い結果が出ています。

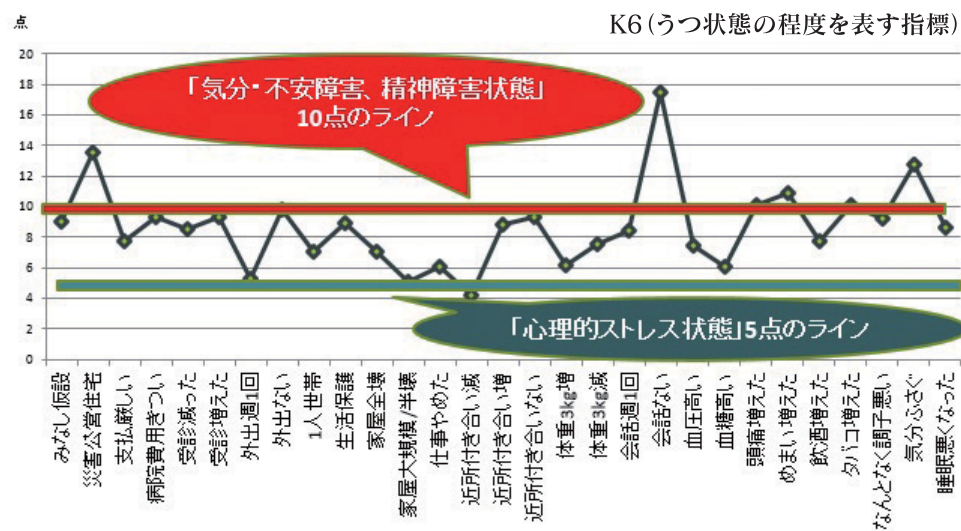
東日本大震災の5年後調査結果では「プレハブ仮設から復興公営住宅や新居へ転居した者では心理的苦痛の増加や暮らし向きの苦しさが続いている」と示されており、熊本地震の被災者も長期的視点で経過をみていく必要があると考えております。

地震翌年の2017年9月には被災者に対する医療費補助が打ち切れ、今後、災害復興住宅やみなし仮設住宅入居者には家賃が課せられていきます。この間、将来の不安を覚え、貯蓄を切り崩し、受診を控えた結果、生命に直結するような身体状況の悪化につながった患者様がありました。受療権(医療を受ける権利)を守り、すべての方が健康に生きていけるために私たちに何が出来るかを今後

不眠症が疑われる人の要因と要因毎の平均点数



うつ状態が疑われる要因と要因毎の平均点数



もしっかりと考えていきたいと思えます。

3つの図は2019年度第3回目調査(調査期間 2019年9月1日～10月31日)の一部です。

当院を受診した患者様567名中同意を得た453名の結果から、数値で結果が表せる不眠指標の「アテネ」とうつ病スクリーニングの「K6」の結果を示します。図中にある項目が生きづらさの課題となっていると考えます。

気分障害・不安障害に相当する心理的苦痛を感じている者(20歳以上で、10点以上)の全国平均は9.7%

厚生労働省「平成30年国民生活基礎調査:こころの状態(K6)入院者を除く」結果との比較



沖縄辺野古支援連帯行動に参加して

たくまの里
運営委員 工藤 陽子

2020年1月22日～24日、全日本民医連第48次辺野古支援連帯行動に参加しました。第1日目米軍基地見学、辺野古、高江の学習、第2日目辺野古連帯支援行動、第3日目沖縄戦の学習と戦跡をめぐる行きました。普天間基地、嘉手納基地では真つ黒な戦闘機が、ごう音をあげながら何度も何度も行きかかっていました。弾薬庫、ヘリパッド、訓練場など聞きなれない言葉に戸惑いました。二日目のゲート前の座り込みでは、現地の方々の必死の訴えを目の前に、私は呆然とゲート前に立っているのがやっとなりました。長い道路に延々と並ぶ土砂投入のトラック、目の前に立ちのぼる機動隊、少し離れると平穏な青い海が広がって、美しいサンゴ礁があります。私達人間は、私達の手で守るべき自然を自ら破壊していると感じました。

三日目のガン見学と平和記念資料館では、戦争の惨さ、理不尽さに怒りを覚えました。戦争は、終わった過去のことでなく、今も続いています。私は決して

日本に基地を作ってはいけな

いと思いました。今回の連帯行動に参加していなかったら、私は一生知らないままニュースでの報道にも平気で無関心でいたと思います。

これからもこの連帯行動に多くの民医連職員が参加できるように支援の輪を広げていきたいです。最後に、三日間現地の案内をして下さった沖縄民医連の瀬長さんにお礼を申し上げます。ありがとうございました。



座り込みをする人を強制退去させる機動隊



埋め立て反対の声を上げる現地の人